

W-3

Copy Formation が織りなす諸現象の表出: Enabling Function の役割を中心に 企画者: 宗像 孝 (横浜国立大学)

全体の構成 (各発表に対する個別の質問は質疑応答の時間にお願ひします)

時間	発表者	タイトル
10:00 – 10:15	司会/宗像	ワークショップの趣旨説明
10:15 – 10:35	宗像	統辞構造の演算時における移動の優位性: 項位置を中心に
10:35 – 10:55	北田	同族目的語構文の派生について
11:00 – 11:20	大宗	検索 Σ とコピー形成と一致について
11:20 – 11:40	大宗・小町	検索 Σ の帰結と展望
11:40 – 12:00	全員	質疑応答/全体討論

1. 同一体の形成について

生成文法理論において、以下、(1) で観察される移動現象は常に議論の的になっている。

- (1) a. **Donuts** were made *t* by students. b. **What** did students make *t*?

(1a) において、主語にある donuts が make と併合 (merge) し、意味役割を与えられる補部位置に基底生成する。その後、受け身文の主語位置である INFL の指定部に移動する。他方、(1b) では、同様に what が make との併合を経て意味役割を受け取る所に基底生成する。その後、C の指定部まで移動し、wh 疑問文の解釈を保証する。両方の移動とも、移動した統辞体 (syntactic object/SO) は意味役割を保証するのに、基位置に同等のものを残す必要性が生じる。

従来、痕跡や連鎖/連鎖条件 (cf. Chomsky 1981) など途中で同一体 (copy) に匹敵するものを統辞領域に導入する考え方や移動操作が併合・一致と複製から構成される (cf. Chomsky 2000) というように、追加の操作等を仮定していた。しかしながら、Chomsky (2021) では、改変禁止条件 (No Tampering Condition) により、(2a) のように John が SO の α と併合する時に、基位置にある John の改変もしくは消去することは禁止されると主張し、そのままの形で基の位置に存在すると規定した。結果、(2b) のように何も想定せずとも、移動後に同一体が移動した位置にも基の位置に存在することが保証されることになる。

- (2) a. [α was, [kissed, John]] b. [John, [was, [kissed, John]]]

しかしながら、(2b) の移動先の John と基位置の John が同じ SO の個体 (inscription) であることは上記のことから導き出されるが、演算中で同一体である保証はない。理由として、第一に Chomsky (2021, 2023) を始め、昨今の統辞領域改変禁止条件 (もしくは内含性条件/Inclusiveness Condition) により、指標を統辞領域に導入することを禁止している。加えて、位相 (phase) 内の演算や操作を全て記録して収納する位相記憶 (phase memory) に類するものを想定しないので、移動した John と基位置にある John が同一体であるという記録を演算メカニズムは有していない。統辞構造を作成する道具立てとして、作業領域に派生途中の SO と構造に組み込まれていない語彙項目/機能範疇が収納され、演算メカニズムが作業領域にあるものに演算操作を適用することから自然のことである。更に、Chomsky (2021, 2023) では、演算メカニズムが構造を構築する特徴としてマルコフ (Markov) 演算であると主張し、構造の派生過程や以前の段階にさかのぼれないとしている。つまり、併合適用後に、同じ SO の個体を複数含む構造が外的併合に由来するものか、もしくは内的併合に由来するものなのか、探知できないため、二つの位置にある John が同一体である保証はないし、同じ SO の個体が繰り返された異体 (repetitions) である可能性を排除できない。

この問題に対処するために、Chomsky (2021) では、同一個体の関係を確立する同一体組成 (Form Copy) という操作を提案し、意味の二面性 (Duality of Semantics) の特性により、同一体組成によって意味役割と関係する基底位置にある John と意味役割に関係しない移動先の John の個体を結び付け、同一

体として組成すると提案された。同一体組成には探索がかかり、探索が同一位相領域内にかかるので、内的併合に局所性がみられることも同時に説明し、位相が計算領域の核となることが導かれることになる。

Chomsky (2023) では、更に一步踏み込み、SO の同一個体が複数存在し、一方が他方を C 統御している場合、同一体になると提案している。併合が既に構築された α と内部の XP を対象とする場合、(3) のように併合される位置から基位置の XP との C 統御が構造から常に利用可能であり、内的併合が C 統御の関係を導出することから由来する。換言すれば、演算メカニズムから独立し、何の操作も不要で、構造上に C 統御の関係 (C 統御構成/c-command configuration) であれば、無条件で同一体として認識が可能になり、演算メカニズムの特徴の帰結となる。すなわち、何の想定もなく常に同一体の関係が保証される。Chomsky (2023) において、同じ位相内にある同じ SO の個体は C 統御構成の関係であれば、同一体と見なされるとしており、同一体組成で見られる探索及び局所性の帰結を引き継いでいるものになる。

(3) [XP₁, [_{α} Y ... [Z, XP₂]]

更に Chomsky は (4) のような話題化 (topicalization) など C 領域の移動にて、 v^* の位相のみで内的併合が起こり、内的併合を起こした linguists は Box に送り込まれ、C の位相主要部を通じて、C-I に同一体の情報を含め、John の情報が利用可能であるとしている。この分析は、同一体の存在を最下層の意味役割の領域にとどめ、循環移動を省き、中間同一体の存在を排除し、一層、簡潔化を進めている。

(4) a. Linguists, all students admired *t*.

b. [... C, [all students, INFL [all students, [_{v} linguists, v , [admired linguists]]]]]

Chomsky (2021, 2023) は同一体組成/同一体認識の分析を拡張し、以下のコントロール構文も PRO を想定しないで、同一体を活用して説明できることを示している。

(5) a. John wants to PRO run.

b. [John_{A1}, INFL, [John_{A2}, v , [want, to John_{B3}, v , run]]]

John_{B3} は run の外項として生成されるのに対し、John_{A2} は want の外項として導入される。その後、John_{A2} を標的とする内的併合を経て、INFL の指定部に John_{A1} が生成される。内的併合のため、John_{A1} と John_{A2} は C 統御構成をなしているの、自然に同一体として認識される。この時、John_{B3} は異なる述語から意味役割を受けているが、同じ位相内で同じ SO の個体であり、John_{A1}/John_{A2} と C 統御構成をなしているの、三つすべてが同一体として見なされる。Chomsky はこの同一体組成/認識の拡張について、構造を構築する演算メカニズムを最小化し、演算の経済性など自然界に存在する原理に従って演算メカニズムを定式化する Strong Minimalist Thesis (SMT) の帰結であると主張し、Enabling Functions の表れだとしている。

2. 本ワークショップの趣旨

本ワークショップでは、1 で示した位相という統辞演算領域を核とする同一体組成/認識によってもたらされた Enabling Functions の事例を積み重ね、Enabling Functions の特徴を明らかにすることを目標とする。各発表が示すように同一体組成/認識は根本的な言語事象に深く関与し、Enabling Functions が幅広い役割を果たしており、昨今の理論が目指す UG の妥当性を検証することにもつながる。

とりわけ、同一体の形成に SMT に基づいた演算の経済性や意味の二面性といった必然的な概念が関与することに着目し、内的併合の特徴を捉えながら、同一体組成/認識が叙述関係・一致・主要部移動・束縛などの諸現象に原理的な説明を行える可能性を追求する。特に昨今の研究では、新たな観点から同一体形成をとらえなおし、同一体の派生を前提とする内的併合に説明を与えただけではなく、(5) のコントロール構文のように PRO を同一体の一環としてとらえなおしている。一致・主要部移動も同一の要素が関与し、束縛も ϕ 素性の同一性 (cf. Kratzer 2009) に着目する研究がある。C 統御が併合を前提とする構造構築の当然の帰結とするならば、コントロール構文と同様に興味深い帰結が観察されることを示す。

参考文献 (抜粋):

Chomsky. 2021. "Minimalism: Where Are we Now, and Where Can we Hope to Go," *Gengo Kenkyu* 160.

Chomsky. 2023. "[Lecture 3] Working Toward the Strong Interpretation of SMT." A talk given at Keio-EMT Lecture Series. Available at <https://www.youtube.com/watch?v=n6r957AgzDw&list=WL&index=18>.